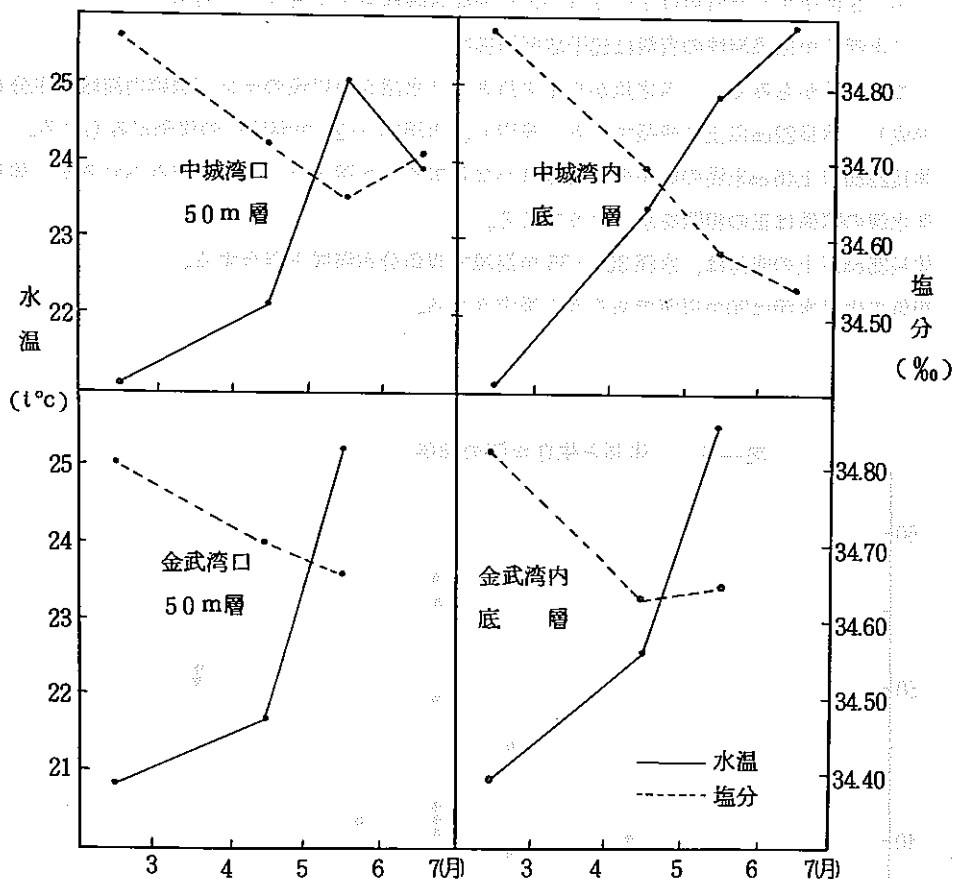


図一四 産卵場海域の海況



II 发育段階別分布生態

1) 发育段階別水平垂直分布

昭和45年度から47年度にかけて、中城湾、金武湾の水深9～50mの全海域で底曳網による調査を実施したが、ハマフエフキの幼魚の漁獲はみられなかった。また48年度、泡瀬内海の水深2～10m、及び金武湾の水深5～10mの海域で曳網したが、金武湾の天願川河口域で、シモフリフエフキを2尾（FL31.5～34.5mm）漁獲しただけで、ハマフエフキ幼魚の漁獲はなかった。

建干網の漁獲物調査及び聞き取り調査結果からみると、図一六に示すように、水深1～3mのサンゴ裾礁内海域に分布することが明らかになっており、それ以深での分布は殆んどないものと推定される。漁獲物調査、及び聞き取り調査から当才魚の出現時期をみると、南風原の建干網、10月以降、知念村志喜屋11月、石川の刺網10月、建干網12月であった。また、8月29日に体長55の幼魚が泡瀬南で籠網に入網していることからすると、10月以降に建干網への入網がみられるのは漁具の選択性によるものと推定されるが10月という時期は海況が夏型から冬型への転換期であることから、海況変化に起因するものがどうか明らかでない。

1才魚以上の成魚については、延縄による漁獲試験結果から体長別の水平垂直分布をほぼ明ら

かにすることができた。

図-5 に使用した資料は1～5月の延縄漁獲試験結果によるものである。

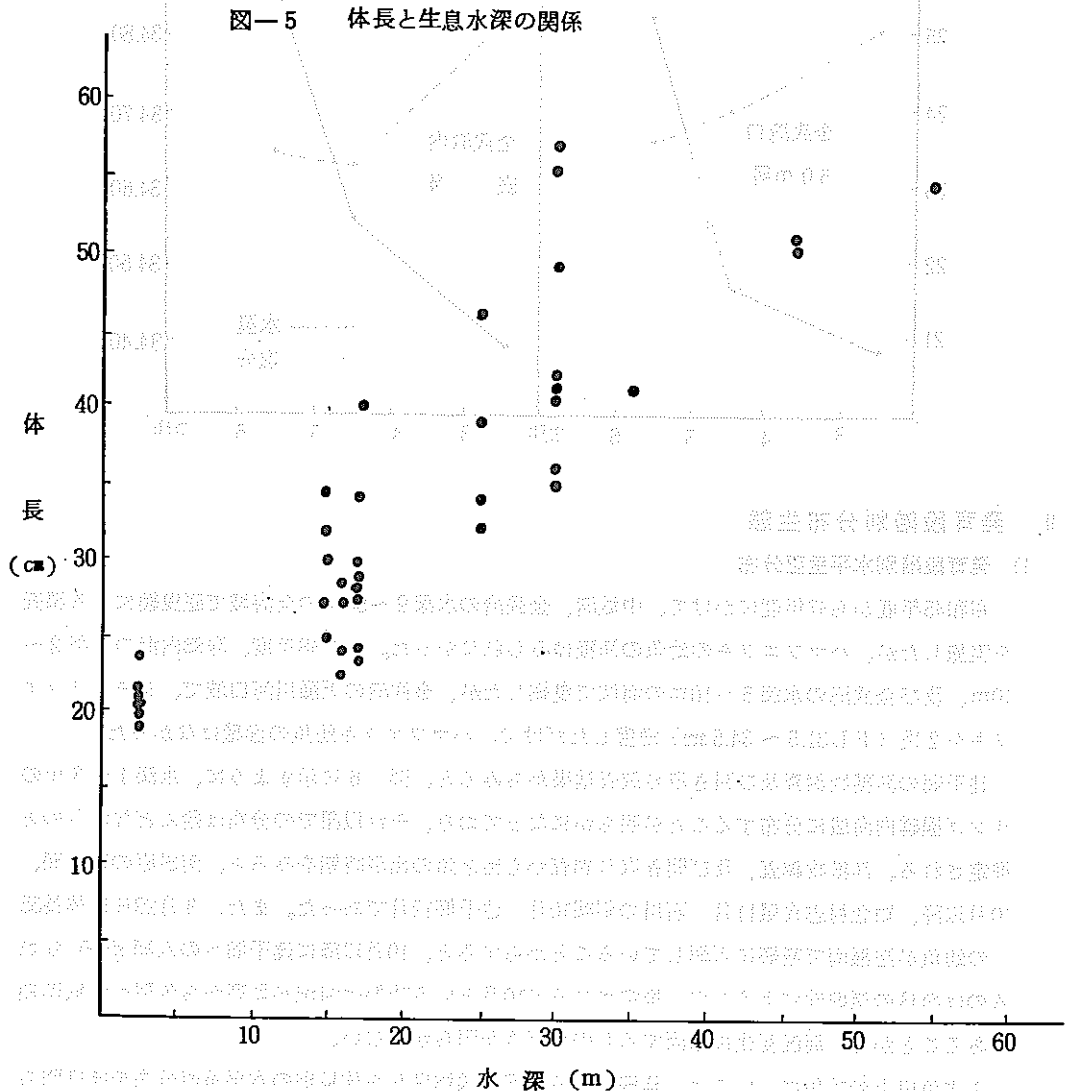
(水深5 m以浅海域の資料は建干域網漁獲物)

この結果からみると、当才魚から1才魚までは水深5 m以浅のサンゴ裾礁内海域に主分布域を形成し、体長22 cm以上に成長すると、離岸し、水深15～20 m海域への移動がみられる。

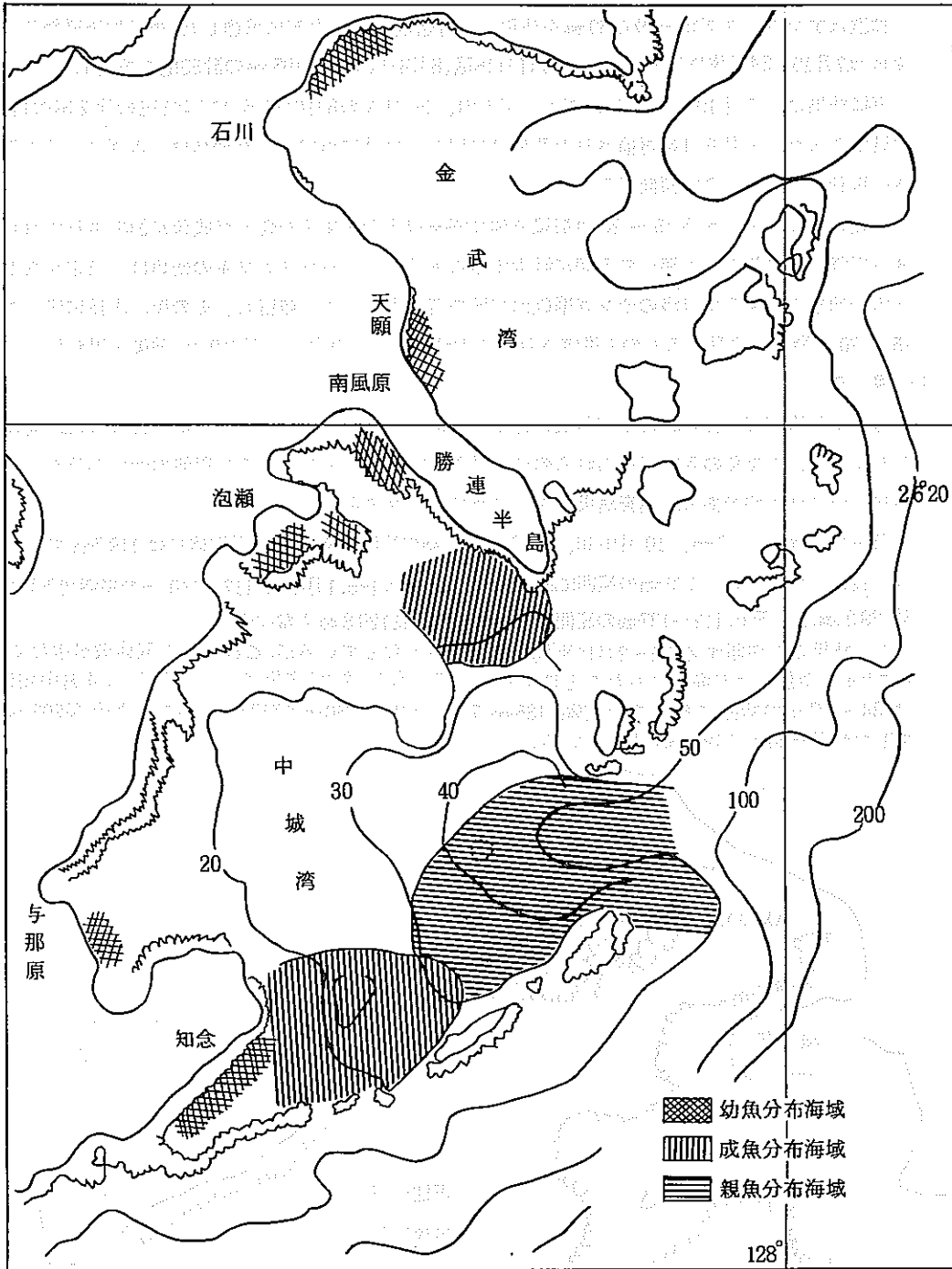
体長22 cm以上46 cm未満の成魚の分布域はかなり広く、水深15～35 mまでみられるが、体長と生息水深の関係は正の相関を示すようである。

体長35 cm以上の成魚は、水深30～35 m海域で親魚分布海域と混合する。

親魚の生息水深は30 m以深であろうと推定される。



図一六 ハマフェフキの発育段階別分布図



2) 幼魚の移動

幼魚の移動及び成長を知る目的から標識放流を実施した。当初、当才魚の放流を計画したが、放流用種苗が得られずに、南風原沿岸の建干網で漁獲した1才魚を放流した。

標識はアンカータダ15mm及び30mmを使用し、背鰭前方の筋肉部に着標した。標識放流尾数及び体長は7月10日34尾体長190~235mm、7月11日18尾、8月8日1尾体長195mmの計53尾を放流した。

再捕結果は、7月10日放流したグループの内、26日後の8月6日1尾、11月に1尾の計2尾の再捕結果であった。8月6日に再捕された個体は接岸し、11月に再捕された個体は、水深3~4m海域へ移動しており、離岸傾向がみられた。

前述したように、水深15~20m海域で体長23cm以上の1才魚を含んだ成魚が漁獲されており、8月以降、1才魚の建干網への入網が減少すること等から、ハマフエフキの幼魚は、当才から1才魚の前半を水深5m以浅のサンゴ裾礁内海域を育成場として、滞留し、その後、成長に伴って15~20m海域へ移動するものと推定され、その時期は8~9月で体長20cm前後と思われる。

3) 成長

8月下旬籠網で漁獲された1個体及び建干網で漁獲した幼魚についての測定を行なった。前述したように、当才魚の入網がみられるのは10月以降であることから、それ以前の幼魚の分布、成長については不明である。調査結果を図-8及び図-9に示した。

8月下旬には体長52mm、10月中旬、98.7~151mmの範囲にあって、平均体長は119.3mmであった。12月上旬、115~170mmの範囲にあって平均体長144.1mm、1月中旬、117~140mmの範囲で平均体長129.3mm、2月下旬、112~137mmの範囲にあって平均体長120.8mmとなっている。

この結果から判断すると1~2月に平均体長は小さくなっているが、これは調査個体数が少なく、たまたま小型魚だけが漁獲されたことによるものであろう。また1才魚についてみると、4月中旬には134~137mmの範囲にあって、平均体長135mm、7月には150~240mmの範囲にあって、平均体長205mm、8月には1個体測定で195mmとなっている。

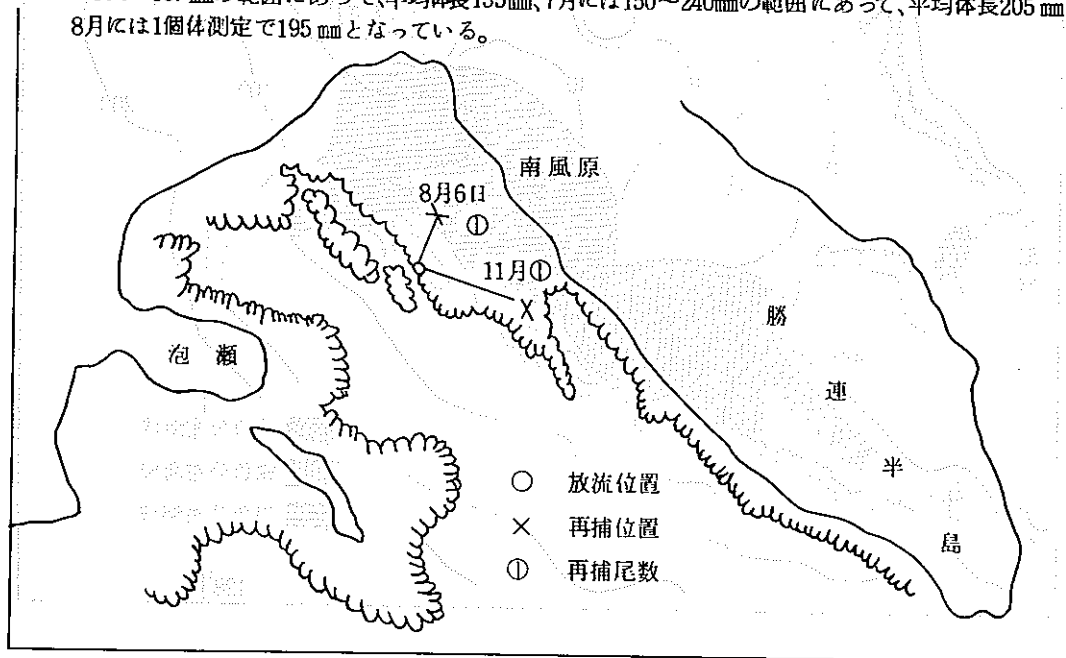


図-7 ハマフエフキ標識放流位置図